

会報

京都マイコン研究会

第 89 号

(通算106号)

1994年12月1日 発行

発行人 圓口佳昭

トピックス or ニュース

来年はイノシシに変貌?

編集部 増田則雄

師走の足音が、もう聞こえる時期になりました。商売柄、11月20日過ぎからカウントダウンが始まり。もう私の脳裏では、今年の計画が一応整理され、来年の計画をプランニングしたところです。今年はまだひとつでしたが、来年の干支、イノシシの如く研究会と一緒に猛烈に突進しようかと……。皆さんも同じだろうと思いますが、如何な計画をプランニングされましたか。

年末の最後の行事、「いま、時代はパソコン。」をキャッチフレーズに実施されているパーソナルコンピュータ利用技術認定試験が、来る12月4日(日)に実施されます。委細は本月の例会に於いて説明される予定です。

第23回

パーソナルコンピュータ利用技術認定試験

平成6年12月4日(日)午前10時ヨリ

例会報告!

11月5日 (pm.6:30)

大山崎ふるさとセンター

参加者氏名 圓口、岩井、中辻、若井、加藤、大塚
中西洋、増田、松田、小寺、河原

11名

6:30 マイコンサロン

7:30 第3回 Works部会

次回例会

日時 12月3日(土) pm.6:30

場所 大山崎ふるさとセンター

内容 Works部会

パーソナルコンピュータ利用技術認定試験要綱

Access部会

1994.11.13 I 10:00~A 2:30~C 5:00

京阪奈学研都市散策 日記

増田

天候は、ポチポチでさすがに立冬に入り、すこし肌寒く感じられる。

若さと希望に満ち溢れた学研都市探検隊員、河原・若井・増田・武田は、一路南へ。静かな山城盆地をひとしきり走り目的の地域にさしかかり、山手の方へ入り込むと目前に開発された山間部が姿を表わし、大きな研究所が立ち並びメインストリートには並木道が、一方には研究所棟がもう片方には、10数年前より開発されている住宅公園の民間の住宅が立ち並ぶ。なんとといってもこの都市の一に押し、二に押し、三に押しはエコロジーをタグフラッグにしていることでしょ。街の大きな部分を、華のエリア・草原のエリア・水辺のエリア・森のエリアが有し、各研究所の進めている研究成果、マルチメディアやハイテクノロジーは、化石燃料の無駄使いや公害を発しない地球環境につながる。私たち人類にとって必ず、解決していかなければならない課題なのです。

若さにまかせ歩くだけ歩き。見るものも見た。草原のエリアで食事もして、水辺のエリアで造られた景色でしたが、なんとなく心を和ませてシャトルカーを戻りに帰路につきました。帰宅して、みんなで環境と若さとは足にくることを実感した。

編集部だより

本年最後の発刊を終えるに至り、言葉を添えさせていただきますと、晴れのち曇りでした。

発行日に間に合わせる原稿や編集時間が無く誤字脱字のおおかりしこと、平にご容赦下さい。なにせ、タイムリミットぎりぎりセーフの毎月で、原稿打ち上がった時がレーザープリンターの起動と封書の宛名と折り込みの作業があり、切手を貼り投函まで約二日かかります。来年度から、武田計子さんが女性の感性を紙面に表現していただけるので皆さん期待して下さい。

連載

『パソコンとMS-DOS 初心者入門』

第6回 (Tomoppy)

11月号続き

17. FC

選択した2つのファイルの内容を比較するコマンドである。

オプションは、/A/B/L/N/T/W などがある。これらを使う必要性は、プログラミングする過程に必要なツールであることを説明するに止める。

18. FILECONV

N88日本語BASIC(86)とMS-DOSの間でファイルを変換するに必要なツールである。このツールは、MS-DOSのOSが広まると同時に、N88日本語BASIC(DOS版)が(86)版に遅れて発売された。MS-DOSの日本語漢字変換も一括変換が広まり、漢字入力が便利となると、「FILECONV」コマンドが盛んに使用された。現在では使われる機会が少なくなったように思う。

19. FIND

一つまたは、複数のファイルを選択した、それらのファイルの中の指定した文字を検索するツールである。

このコマンドは、「FC」コマンドと同様にプログラマーに必要なツールである。けれども、ファイル名を検索するのに便利なコマンドである。

n:>DIR B: | FIND /C "DAT" [ret] ドライブB:にあるディレクトリ "DAT" の文字列を含んだ行のみを表示する。

n:>DIR B: | FIND /V "DAT" [ret] ドライブB:にあるディレクトリ "DAT" の文字列を含んだ行のみを非表示する。

20. FORMAT

指定したドライブ(HDD、FDD、MOドライブ)のディスク媒体をMS-DOSで使用出来るように初期化するコマンドである。

n:>FORMAT [ret] このコマンドのみで、MS-DOS 5.0以降は、画面に各装置の媒体を初期化するか、メッセージ・メニューが出るので、各オプションの符号を覚える必要が無くなった。

n:>FORMAT n: /S[ret] 初期化後、MS-DOSのシステム関連のファイルを媒体に書き込む。

n:>FORMAT n: /9[ret] 2DD(720KB)媒体を初期化する。このオプションに続けて「/S」とすれば、システムも作成する。この媒体にテキスト・ファイルを書き込むと、他のマシン(MAC、UNIX系のWS)でも読込む。

n:>FORMAT n: /M[ret] 旧PC98系に適用されるオプションである。2HD(640KB)を初期化する。

n:>FORMAT n: /P[ret] 初期化を開始すると、ディスクの挿入やキー入力のメッセージなどを画面に表示しない。

20. JOIN

ディスク・ドライブ名をディレクトリ名として取り扱えるようになる。

n:>JOIN C: A:¥DRV [ret] C:ドライブが、A:ドライブの¥DRVサブディレクトリとして使用出来る。例えば、n:>DIR A:¥DRV¥*. * [ret] とすれば、C:ドライブのディレクトリのリストが読めるのである。

n:>JOIN C: /D [ret] 前記の機能が解除される。
n:>JOIN [ret] 現在のJOIN状況を表示する。

21. KEY

PC98系では、ファンクション・キー機能を使用不可にしたり、再使用可にする。

n:>KEY /S [ret] 機能を再使用可にする。
n:>KEY /D [ret] 機能を中断する。
n:>KEY [ret] メニュー画面を表示してキーの機能更新や登録が行える。

リファレンス・マニュアルには、何と5~6頁の大きさに解説がなされている。

22. LABEL

ディスク媒体のボリュームラベルを作成したり変更、削除のコマンドである。事務書類の分類で言えば、各ファイルを書類とすれば、分類して保存するホルダーがディレクトリ名で、フォルダを保管するキャビネットの名前が「ラベル」である。従って、フロッピー・ディスク1枚が小形のキャビネットである。ハードディスクやMOディスクにもラベル名は付けられるから、大形のキャビネットに相当する。皆さん、不精せずにそれぞれに名前を付けておくと不測の事態に得することもある。

n:>LABEL n:KYOTO [ret] n:ドライブに名前が付く。

23. LIB

ライブラリ・ファイルの作成や管理に使う。このコマンドはプログラマを目指す方は詳しい参考書をどうぞ。説明を省略。

24. LINK

オブジェクトモジュールをリンクするコマンドである。「LIB」とコマンドと同じ用途に使うので説明を省略。

やっとな、頭に「L」文字の付いたコマンドまで終了した。さあ、これで年末に片付ける仕事の一つが終わった。皆さん、年末年始の世の中は騒々しいですが、そこはオタク族になって、DOSコマンドをいろいろとテストした結果のご質問を待っている。

(続く)

プロフィール

(上田・神賀・田中・笹本・吉田) 様の入稿をお待ち

していますが入稿がありませんので、甚だかつてですが今回もおやすみします。

デスクトップパブリッシング プロフェッショナル 部会情報

明朝体

前号より続き
秀英合(一九二五年、日清印刷と合併、大日本印刷と改称)は、明治九年(一八七六)に佐久間貞一(一八四八-一八九八)によって創業された。初め築地活版所から活字を購入していたが、明治十四年(一八八一)年から自家鑄造を開始し、その翌年に活版製造所製文堂を創設、広く一般に活字類を販売するようになった。製文堂(秀英舎)は、いつから独自の明朝体をもつようになったのだろうか。明治二十二年(一八八九)発行の『製文堂活字見本帖』がある。そのなかの五号明朝体が最初のものである。しかし、まだ、これといった特徴のある書体ではない。このあと二回ほど改刻が続く、明治四十年(一九〇七)からの大改革と取組み、秀英体が先成された。その全容は、『活版見本帖』(一九一〇年)によってみることが出来る。菊判、三四ページ、築地活版所の『活版見本』(一九〇三年)と対応するものである。秀英体は築地体からおよそ六年ほどおかれて完成された。種字彫刻は沢畑次郎が担当したといわれる。秀英体の特徴は、築地体に対して文字のふところを大きくとり、縦線の幅をやや細身にしたものである。

そのため、築地体にみられる雄渾、力強さといったものは薄らぎ、優雅な表情をみせている。なおここで、築地体、秀英体の完成という表現を用いたが、両者はこのあと改刻が続けられていくしかし、それは明朝体の特徴を根本的に変えるようなものではなく、完成された書体を土台にした、そのバリエーションでしかなかった。ひらがなの書体について触れておけば、ひらがなは和様からでたもので、明朝体の改刻とともに、それと調和をはかりながら、書体を整えてきたものである。明朝体の改革過程をごく簡単にたどってみたが、これはまさに、世紀の大事業であった。その成功によって活版は黄金時代を迎え、優れたタイポグラフィもみられるようになった。また、改革の要因や社会的背景などについても触れた。おしまいに、明朝体は、活字書体にとり入れられてから、すでに一世を超え年月が過ぎた。その間、たえず文字印刷の首座の地位をしめながら現在にいたっている。一世紀といえは、近代日本の歴史過程とほぼ見合年代である。しかも、ほとんどの文書印刷が、明朝体によって表現、記録、伝達されてきた。ということは、活字に転換された言語文化のほとんどが明朝体を通じて読まれ、理解されてきたことを意味している。このように、明朝体は、日本語を表わす代表的な活字書体として、日本人の言語生活のなかにふかく溶けこみ、思想、精神史の形成とふかくかかわってきた。今後、明朝体にかわりうる活字書体が創造できるかどうか。

それはわからないが、それはそれとして、明朝体のよさを、なおいっそう洗練していきたいものである。(完)

落花ノ雪ニ踏迷フ
野ノ春ノ櫻ガリ紅

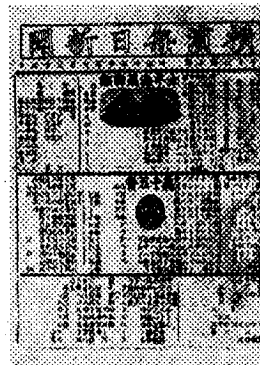
明朝五號

如有煙撲口鼻視其中則乾若敗
累子怪而問之曰若所市於人者
將以實蓬豆率祭祀供賓客乎將
街外以成感醫也其矣哉為歎也
賣者笑曰吾業是有年矣吾業賴
是以食吾業吾售之人取之未嘗

さきゆめみしあひもせずん
イロハニホヘトチリユルヲ
ワカヨクアレソツネナラムウ
キノオクヤマケフコエテア
ナキユメミシエヒモセスン



新聞復後の『長崎新聞』第二頁、表紙と開巻二三ページ



新聞復もない頃の『横浜毎日新聞』

デスクトップパブリッシング プロフェッショナル 部会情報

活字三題

増田則雄

読みやすい、揃った美しい文字。大量に同じ物が印刷出来る。この三点が活字が造られた原因ともいわれています。

しかし、現在この三つの要素総てに於いて。いや、それ以上と言えるでしょう。今のコンピュータの能力とソフトがあれば、今まで文字と係わって来た人達と、何も知らない極一般の人との垣根は、無に等しいのである。差があるのは、経験とその人の感性だけと言えるでしょう。

何時までもプロではなく、プロがプロで無くなる時はもう来ているのです。世間を知らぬ間に、極普通の人以下に成り下がっているのがプロです。

最近、ある一つの業界で目の当たりに感じ要りました。コンピュータは、計算機の代わりに、活字の代わりに、タイプライターの代わりにと造られてきました。

た。そして、どんどんと、既成のシステムを浸食してきました。新なるターゲットが映像と音声などへの挑戦マルチメディアなのです。

タイポグラフィ

その昔、エディトリアルデザインの世界に興味を持ったのは、活字の組版指定が加減乗除の単純計算で済むことに魅せられたからであった。それが、組版の殆どが写植にとって代わられ、お蔭で微分積分ほどでないにしても、電卓片手の甚だしんどの指定作業に追われることになってしまった。活版には、動かしようのないインテルやクワタが組み敷かれ、一寸した暖味さも許容しがたい頑固なところがあった、それがかえってある種の安心感を与えてくれていた。写植になると、字間をツメたり、文字を

平たくしたり長くしたり、はては斜体をかけたりしての変幻自在さで、良くいえばタイポグラフィの可能性を伸長させたといえるが、どこか優柔不断なところがあって、私には楽しき作業でもあり、個性の出せる唯一の遊びどころの一部分でもあった。同じことは書体についてもいえる。何よりも写植には書体が多すぎる。その上、どこのメーカーもまるで化学式のような書体記号がつけられていて、これはとても覚えられたものではない。余談ながら、写植見本帖をみるたびに、 π など覚えさせられたあの幼い日の悪夢のような授業風景を、いつも想起する。「水」ではないけいけいのか、と呟いていたあの時のように、書体記号を朱記すること、以前は自ら落ちこぼれの烙印を押しているような気にもさせられていた。

しかし、数年前よりパーソナルコンピュータで版下作成をするデザイナーが増え。さらに、ウィンドウズ環境での作成が容易に。また、書体数も写植の数をも上回るなどで。現在各写植メーカーが製造を中止したり、経営が成り立たない今、文字を写植機で創り出す時代が、過ぎさった。時代の移り変わりの早さはますます加速する。

本木昌造逸事

足立巻一

前号より続き

そこにたまたま薩摩の儒者重野安禪が上海から活字を持ち帰ったものの使い方がわからずにそのままにしていると聞き及び、これを譲り受けて試みたが思わしい結果は得られない。ついで宜教師フルベッキの紹介で上海の美華書館の活版技師を招き、長崎製鉄所の付属として活版伝習所を興善町に設け、活字鑄造と印刷とを始めた。

その活版伝習所で本木とともに働いたのが陽其二である。陽は代々の唐通事で、文久三年の徳川家茂の上洛に長崎丸に乗り組み、また幕府の海軍に属して品川一兵庫を航行していたが、それが長崎製鉄所に転勤となり、本木とともに活版事業に従うようになった。鉛活字の活版と洋紙とを用いて最初に新聞を発行したのは明治三年の横浜毎日新聞であるが、その創刊にあたって陽は神奈川庁に招かれ、印

刷を引き受けたのである。本木も長崎で有志とはかって新聞発行の計画を進め、明治六年正月に長崎新聞を創刊した。有志は金融事業で成功した松田源五郎、吉田松陰と親しかった眼科医池原日南、それに西道仙であった。日南は高崎正風の書画の師であったほど書にすぐれ、もっぱら種字の原稿を書いた。

しかし、この長崎新聞は一年足らずで休刊し、本木は東京・大阪で活版製造所を経営したが、ほどなく病気になるって長崎に帰った。そうして教科書販売業者本田実らによる長崎新聞復刊を助け、再刊号が西道仙を編集長として明治八年二月に発行された。わたしの祖父敬亭はこれにかかわるのである。こうして活版草創史はまことに劇的であるが、ことに本木昌造の人生はおもしろい。これについて父の孤川は二六新報の「逸事逸話」というコラムに書いている(大正元年)。「本木昌造は我が国に於て始めて鉛製活版を作

り出せし人にして、東京築地活版処もその創立に係るは世の知るところ也。されば其の名声は独り我國に轟くのみならず、カックストン・マガジンにも、ジャパニーズ・ガツテルベルヒとしてその功業をたたへられたり。上野帝室博物館に陳列せられたる西洋古史談は

明治七年氏の印刷せしものにて、其の苦心を語る記念物なり、ところが、本木の知られるところは少ない。「氏は独り活版製造のみならず、海運事業・製鉄事業にも指を染め貢献する所多かりしに、独り活版術に就てのみ其の名伝はるものは、寧ろ不幸といふべし、ここで孤川は愉快な逸事を紹介する。本木が京都の川魚料亭平八に案内されたとき、盤上にドジョウが出ていたのを見て、オランダの本にソバに、ある薬をふりかけて湿地に埋めるとドジョウになると書いてあると主人に教え、長崎に帰ってその薬を送ってやった。主人は早速実行したが「あな不思議、蕎麦は消えて跡もなし。されど、鱈と化して逃げ出せる様子もなかりき、しかし、本木は主人をからかったのでもなく、そう信じて疑わなかったのだという。孤川はそれも時勢の故だとし、こう結ぶ。「本木氏は明治八年故山に歿す。年五十三。氏人となり広額無髯、風貌勝海舟に酷似するも奇なり。愛妾品川氏、六、七年前まで存命せしが知らず、今猶恙なきや否や、わたしはその長崎新聞を県立長崎図書館で見したが、活字は楷書体に近い明朝体で変体がなまじって

(完)